

## 鎌倉市立御成中学校

研究テーマ：「主体的・対話的で深い学びのある授業づくり～深く考え、判断し、自ら進んで学習する生徒の育成を目指して～」

### 1、実践の目的

御成小、稲村ヶ崎小、御成中の3校が、共通に「きく、考える、表現する」を大切にしたい授業づくりに取り組んだ。義務教育9年間を通して、良さを認め合い、他者の意見をよくきき、自らの考えを再構成し、他者に自らの考えを伝えていくことを繰り返しながら学んでいくことで、深く考え、判断し、自ら進んで行動することのできる児童・生徒の育成に努めていく。

### 2、実践の内容

#### (1) 学びの場の保障

##### ①学びづくりルームの運用について

別室登校生徒の学びの場として、「学びづくりルーム」を充実させた。安心して個別に学ぶためのパーティション、教職員や他の生徒と関わりながら学び・過ごすための円卓などを設置した。ゲーム形式の教材やマット等も用意し、学校ならではの関わりや体を動かす学びができるようにした。

生徒の出席状況は、職員室側入口のホワイトボードに記入され、各自が予定や学習内容を記録するファイルによって、教職員が状況を把握し、支援することができる。



小学校の内容の学び直しができるよう小学校の教科書も準備し、教員が小学校での学びを確認できる場にもなっている。

#### ②3校合同研修

3校の教職員が全員集まり、早稲田大学教育・総合科学学術院教授の小林宏己先生の講演『「主体的に学習に取り組む態度」をどのようにとらえるか～「主体的な学び・・・」を保障する授業をどのように進めるか～』を聞き、小学校で学習した知識が中学校でより深化していくことが大切であることを共有した。今後の研究に役立つものとなった。

#### ③3校合同打ち合わせ・授業見学

3校の研究担当が学期に1回集まり、それぞれの学校の研究主題や研究方法を確認し、学びづくりの方向性を一致することができた。また、それぞれの研究授業のときだけでなく普段の様子を見学に行き、その学校で取り組んでいることについて理解を深めていった。

#### (2) 個人テーマを設定

指定研究テーマである【主体的・対話的で深い学びのある授業づくり～深く考え、判断し、自ら進んで行動する生徒の育成を目指して～】をベースに、生徒が面白い・楽しいと感じ、主体的に学習しようとしていくことができるかをもとに、教員一人ひとりが1年間の個人テーマを設定し、1年間かけて授業研究を行う。年度末の校内研修の時間を使って、発表を行った。

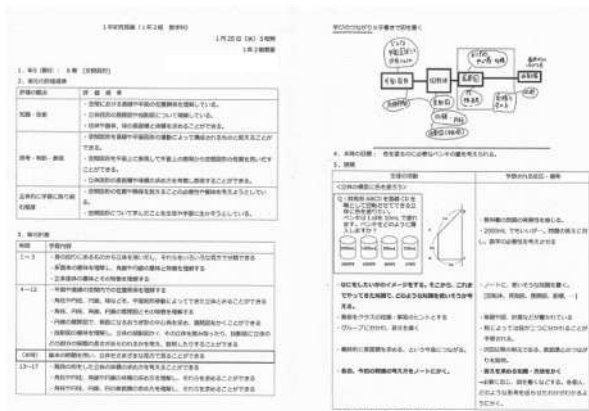
| 個人テーマ   | 個人テーマ設定の理由   | 研究方法  |
|---|--|---|
| 授業で学んだことが毎日の生活の中で、なるほどなるのか、こうするとうなるんだろかとつながる授業      | 研究したい目的、視点や気づきを入れ、(これを観たい)と観たものになる。学習の目的とする(進歩は継続だが、進歩が人それぞれ)に気づく。今年度取り組んでいるなか、なかなかその力を伸ばすことができていないように感じている。昨年の研究授業でもテーマを協賛(取り組)できたが、まだほざきりとした可能性を身につけることができなかった。今年度も同じテーマを掲げて取り組んでいきたい。 | 生徒の反応や声かけ、教材学習後の振り返り、1年間の振り返りなどを進めさせていく。また、実践後の振り返りシートを用いて、進歩を確認できるようにしていく。                                   |
| 「読められて楽しい」を重視できる授業方法とは                              | 読書を「読んで楽しい」「読めて楽しい」を身につけてもらえようとする。授業で取り組んで来たつもりだが、読書を「読んで楽しい」「読めて楽しい」と感じてもらうことができていないように感じている。特に「読んで楽しい」と思える授業実践に取り組んでいきたい。  | ・授業研究(教科の工夫、他の教科との比較等)<br>・読書の振り返りシートを用いて、読書の種類や読書の方法を振り返り、読書の楽しさを共有していく。<br>・研究で行っているアンケートの感想をもとに授業をつくらせていく。 |
| 読書で「読んで楽しい」「読めて楽しい」授業を自覚して実践したい。書きたい生徒が自分で行動する授業づくり | 生徒が主体的に学びに向かうためには、導入で読書の楽しさを伝え、学びたいと思える環境設定が必要だと思つた。   | まとまりのある英文を提示し、生徒が興味を引くような内容のものを選び、少しの準備のまとまりを持たせて慣れさせる。読書を読んだ後の問いを工夫する。                                       |
| 生徒の心を動かすための導入、発問の工夫                                 |  | 授業の経験、御成中学校など他校に活用できるような実践の発表で実践していく。   |



### (3) 授業研究

年間3回行われる研究会は、各教科の指導案について、グループごとに事前検討し、研究会当日に実証授業を行い、その後研究協議をし、小林先生から指導・助言をしていただいた。

研究会を繰り返し行う中で、指導案の形を少しずつ変更していき、その授業で大切にしたいところのつながりを示すような図を取り入れていき、深い学びにつながるよう授業構成を考えていった。



3回の指導・助言の中で、「個別最適な学び」「協働的学び」を授業の中で取り入れることで、生徒が主体的・対話的で深い学びにつながることで、また教材、活動から生まれる「問」を探求する過程で、知識や経験が繋がっていくので、この問がとても大切であるということを知った。

## 3、実践の成果

### (1) 学校の進むべき方向性

3校共通の大切にしたい「きく、考える、

表現する」ことから、生徒が主体となる「ききたい、考えたい、表現したい」と思えるような研究を行ってきた。年度当初に個人テーマを設定し、学校全体での研究+個人での研究と2つの方向から授業研究を進めることができた。研究を進めていくうちに、「ききたい、考えたい、伝えたい」の深化として自分の経験や知識が繋がることを通じて深い学びに結びつき、その経験がまた新しいことへのエネルギーとなり、次の「ききたい、考えたい、表現したい」につながる職員内で話し共有することができた。学習が繋がることによって自分の未来へつながるように感じられる授業・学校生活となるよう日々研究を重ねていく。

また、全ての生徒の学びの場を保障できるよう、「学びづくりルーム」をつくり、どのような空間であれば安心して主体的に学び続けられるかを考え、形としていくことができた。小学校の教科書も配置し、生徒の学び直しだけでなく、教員が小学校での学びを確かめることにもつながっている。

### (2) 生徒の変容

研究を続けていく中で、生徒の学習に対する意識が変わっていった。「何のために学習するか」「何のために知識を身に付けるのか」この質問に対し、以前のような「テストのため」や「入試のため」という言葉ではなく、「日常生活に役立てるため」や「自分の考えの幅を広げるため」という生徒が増えていった。

## 4、今後の展開

今年度の研究を経て、教師が学びのつながりを意識したことで、生徒にもそれが伝わり、学習がより継続的・発展的なものになってきた。この取り組みを継続することと、より一層深化させることに励んでいく。